海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/9/01　～2017/9/30　)

１．勉学の状況

韓国の大学は大体9月から秋学期が始まります。成均館大学校でも8月末から授業が開始され、大学は学生たちで大変にぎわっていました。私も早速、交換留学生専用の語学授業（月曜日と水曜日に3時間ずつ)、大学院の授業（金曜日3時間）を正式に受講登録し、他にも学部の教養科目を1つ（月曜日と水曜日に1.5時間ずつ）聴講し始めました。

語学授業では、最初の回にレベルチェックテストを受講し、その結果次第で、高級（上級）・中級・初級クラスに分かれます。自分の希望次第でもクラスは変更できますので、最初の 2・3回は授業参加者の入れ替わりがありました。授業の進度は速く、その日に習った単語や文法を復習するのが少し大変です。ただ、外国人向けの韓国語学習授業であるため、先生はある程度ゆっくりと明瞭に韓国語を話してくれるので、リスニングの学習にもちょうど良いと思います。

問題は大学院の授業です。当然ながら、教授と大学院生の間では韓国語で議論していますので、話すスピードは速く、きっちり聞き取ることが大変難しいです。私の専攻は韓国史で、日本でも今までに色々な専門的知識を学んできました。そのため、授業中の議論内容はある程度理解できるのですが、細かなニュアンスや議題の移り変わりには、なかなか追いつけない状況です。今年の授業テーマは「韓国近代政治史」で、これに沿ったテキスト（専門書）を講読しています。毎回3名が担当箇所に関するレジュメを作成して発表する形式ですが、日本の大学院授業よりも、毎回の授業で読まなければならないテキスト文量及び発表回数が圧倒的に多い印象を受けました。そのために、毎回の授業準備をするだけで1週間の大部分の時間を使っている現状です。日本の大学院の授業の方が学生に優しいかもしれません。

大学の授業の他にも、韓国の教授や大学院生に誘ってもらい、学外のセミナー（研究会）やスタディ（院生の勉強会）にも初めて参加しました。この場での議論については、上記の大学院授業の時と同じく、詳細を聞き取ること、自分から発言することがまだ難しい状況です。ただ、とにかく参加したことで、韓国の研究者や院生と知り合う第一歩を順調に踏み出せたと思っています。月1回程度の集まりがほとんどですが、10月からも毎回参加する予定です。

２．生活の状況

私は現在、大学から徒歩5分ほどの大学寄宿舎に住んでいます。部屋は、学習スペース・キッチン・トイレ・シャワーの共同スペースと、2名ずつ寝る小個室に分かれています。ルームメイトは4名（台湾・中国・韓国・カナダ）で、全員の母語も専攻も違います。そのため、部屋の共通語として、英語で日常的に会話をしており、私も何とか片言の英語でコミュニケーションを取っています。一緒に住むにつれて自然と仲良くなり、時々は一緒に外食をしたりしています。入

居当初は色々とトラブル(Wi-Fi が通じない、キッチンの火力が上がらない等)がありましたが、今は特段不便を感じずに暮らしています。強いて言えば、寄宿舎では飲酒が禁止されており、部屋でビールを飲めないのが少し残念なところでしょうか。

大学では、大学院史学科の院生たちと早速知り合うことができ、史学科研究室で勉強しながら、その休憩中に雑談したり、コーヒーを飲みに行ったりしています。向こうも色々と気を遣ってくれるので（私が少し年配だからか？）、大変ありがたいのですが、もう少し気軽にしゃべれるようになりたいと思っています。そのためには、私の韓国語能力のさらなる向上が必要でしょう。

余談ですが、ほとんどの交換留学生は、英語だけで受講できる専門授業と韓国語の語学授業を取っているので、意外と一般の韓国人学生と知り合う機会が少ないようです。英語で受講できる授業が多いのは留学生にとって良いことなのかもしれませんが、せっかく韓国の大学にいるのに英語だけ（もしくは同じ国の学生同士で母語だけ）しか話す機会が無いのはどうなのか、と少し疑問に感じました。ただ、その一方で、色々な国から来ている交換留学生同士の間では英語でコミュニケーションを取ることが必須ですし、韓国語初級者が普通の授業を取ることは難しく、一概に否定できないところです。成均館大学校も、千葉大学と同じく、「グローバル大学」という看板を掲げて、多くの留学生を集めていますが、授業言語の問題などの点で共通する様々な課題があるのではないか、と感じました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/10/01　～2017/10/31)

１．勉学の状況

9 月末から 10 月の初めの韓国は、秋夕（チュソク）連休期間に突入します。成均館大学校も 10 月 6 日まで休みとなりました。語学授業や大学院のゼミも当然お休みとなりますので、新学期が開始してから授業についていくのに必死だった私にとっては、束の間の休息期間となりました。実際には、「休息」などできませんでしたが、この間の生活については、後述します。

秋夕連休が終わると、10 月中旬からは下旬にかけて、中間試験の期間に入ります。私も語学授業の中間試験があり、これまで習ったことの復習に追われました。授業で習った文法事項や単語をただ聞き流すだけでは意味がなく、しっかりと身に付けるための復習、さらには実生活で話してみることの必要性を痛感させられました。試験結果については…触れないでおきましょう。

大学院の授業には、相変わらずに多くの時間を割いて準備を行っています。少しは慣れた、と言いたいところですが、まだまだ深く議論に参加できず、必死に聞き取っているだけの時間も多いのが実情です。月末には学外のセミナー（研究会）やスタディ（院生の勉強会）がありましたが、この時は、院性同士で率直に議論する雰囲気があるせいか、言語の問題に気後れすることなく発言の機会を少し増やすことが出来ました。

こうした韓国の大学院を送る中で、自分が今まで学んできたことを改めて問い直す機会も増えたと思います。例えば、授業やセミナーの議論の中で、日本での研究の現状についても質問を投げかけられることがあります。また、韓国朝鮮史に関する議論でも、その比較事例として、日本史の事項について質問を受けることがあります。私は留学前まで、日本の大学・大学院で韓国朝鮮史を学んできましたが、そうして学んできたことを過不足なく韓国の教授や院生に説明できているのか、自問自答し、時には自信を喪失しかけることが多々あります。また、「日本から来た院生」だからということで、近代日本史や日本の歴史学界の研究状況に関する質問も時々受けることがあります。その際、もちろん言語の問題もあるでしょうが、しっかり応答できない時が多々あります。実は今まで、自分の専門（韓国朝鮮史）外であることを口実にして、「日本」や「日本史」に関することを深く突き詰めて考えてこなかったのではないか、という疑念に度々襲われます。「日本人」である自分は日本史についてある程度知っているだろう、という無自覚な驕りがあったのかもしれません。私が一方的にただ教えてもらうだけではなく、自分も周りの院生や若手研究者にとって何か有益な知識や視点を少しでも提供したいと、強く感じた 1 ヶ月でした。

２．生活の状況

冒頭でも述べましたが、秋夕連休に入ると、大学だけではなく大学周辺の店なども休業します。韓国の方々は自分の故郷や祖父母の家に家族で帰省（ラジオニュースで「民族大移動」と言って

いた）するため、普段は賑やかな大学周辺も人の数が大幅に減り、静かな雰囲気となります。この連休に海外旅行や国内旅行をする人も多いそうです。有名な観光地は混むから行かない方が良いというアドバイスを周りから受けましたが…。いずれにせよ、私はやらなければならない作業があったため、連休中もほぼ毎日大学の研究室に通うという、何とも味気ない休暇となりました。特に苦労したのが食事面です。大学の食堂も周りの店も休業しているので、食べる場所がないのには困りました。そんな中でも、鷺梁津水産市場に留学生仲間で行ったことは楽しい思い出になりました。市場１階で新鮮な魚介類を買い、そのまま２階の店に持ち込んで刺身（フェ）や焼いて食べましたが、本当に美味しかったです。機会があれば、さらに様々な市場巡りをしてみたいと感じました。

陰暦（旧暦）を基にして行われる韓国の秋夕は、日本にはない祝日です。私にとっては初めての秋夕「体験」だったため、実態はともかく、それだけで新鮮に感じる日々でした、このように、留学生活を送る中では、当然のことながら、日本にはない韓国社会の慣習や制度などに興味が惹かれます。例えば、大学で軍服姿の男子学生を時々見かけることもその一つです。韓国で徴兵制が敷かれていることは有名ですが、私の周りの男性の院生たちも、兵役をすでに終わらせている人が多いなという印象でした。もちろん、まだ兵役を済ませていない人もいるようです。彼らからは、徴兵制や軍隊生活にまつわる色々な話を他にも教えてもらいました。兵役期間や配属先、様々な服務形態（例えば、学期中は大学に通い、休暇中に軍事訓練を受けるタイプとか）があるようですが、複雑すぎて、私にはまだよくわからない部分が多いです。単純な好奇心だけで気軽に話してはいけないとも思いますが、こうした兵役や軍隊生活に関する事柄について、学生たち（男子学生だけではなく女子学生も）の本音を知りたいという気持ちになりました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/11/01　～2017/11/30)

１．勉学の状況

今年 11 月のソウルは、気温が氷点下まで下がり雪が舞う日もあるほど寒い日が続きました。冷たい風に耐えながら大学に通う毎日でしたが、ようやく勉学のリズムをつかめてきたように思います。しかし、その一方で、一筋縄ではいかない語学の問題に新たに直面する 1 か月でもありました。

大学院の授業では、9 月から講読していたテキストが読み終わり、次のテキストの講読に移りました。以前の月間報告書でも述べましたが、1 回の授業で読む講読テキストの分量が多く、進度も速いため、毎回の授業準備が一苦労です。また、講読テキストを新たに用意する場合、どのように調達するのか、非常に苦心します。毎回新品のテキスト（研究書 1 冊）を買うのは経済的な負担が大きいので、中古書店を利用したり、図書館から貸出したテキストを印刷したりして調達しています。大学院の授業だけではなく、他のセミナーや勉強会の講読テキストも同時並行で用意しなければならないので、油断しているとすぐに調達が遅れ、ひいては準備自体も遅れてしまいます。ただ、講読テキストを調達する中で、色々と韓国の図書館や書店の利用の仕方も学ぶことができ、自身の研究をする上で大きな助けとなりました。

大学院の授業では、少しずつ参加者の発言や議論をある程度正確に聞き取れるようになっていると実感しています。しかし、自分が何かしら意見を言う時、頭の中で考えていることを十分に韓国語で表現できない、相手に上手に伝えられない、というストレスを次第に感じるようになってきました。韓国語を話すだけで必死だった留学当初は、そうした気持ちはあまり感じませんでしたが、最近は、環境に慣れて周りを見渡す余裕が出てきたせいか、もっと上手に過不足なく自分の意見を伝えたいという「欲」が出てきたようです。おそらく、自分の実感と実際の語学力が釣り合っておらず、言いたいが上手く伝わらないという「もどかしさ」も根底にあるように思います。冷静に考えてみれば、留学してまだ半年も経っておらず、すぐに韓国語が流暢に喋れるようになるわけがありません。高望みせず、焦る気持ちを抑えて、地道に勉強していく必要性を改めて再確認した時期となりました。

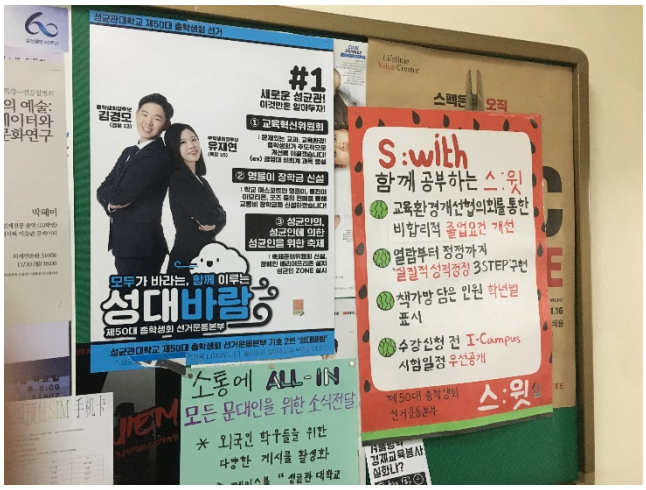
２．生活の状況

11 月の生活で、まず強く印象に残った出来事は、11 月 15 日に韓国慶尚北道で起きた地震です。慶尚北道の浦項などは大きな被害を受け、韓国の高校生が受験する大学入試試験（修能試験）も延期となりました。日本でも多少報道されたかもしれませんが、韓国国内では地震のニュース一色となりました。私は全く気づきませんでしたが、ソウルでも揺れを少し感じたとか。日本とは違い、韓国では地震はほとんど起きないと思っていたのですが、今後は注意した方が良さそうで

す。

それから、大学生活で特に印象に残ったのが、大学での選挙活動です。11 月に「総学生会」と呼ばれる学生団体の執行部（会長・副会長など）を決める選挙が行われたのですが、その際に様々な選挙活動をしていたのが印象的でした。ビラ配りやポスターはもちろん、大きな横断幕や両陣営のスタッフによる謎のダンス（？）などの賑やかな選挙活動がキャンパス内でよく目につきました。公約も、学生奨学金の拡充など、かなり具体的な内容です。大学院の友人によると、総学生会の活動を経て実際に政治の世界に入る人もいるらしいとか。日本とは異なる韓国の大学生たちの「政治参加」の一端を垣間見た気がします。

←学生会館の横の横断幕



←選挙ポスター

11 月の下旬には、ソウル大学校大学院に留学している日本人の友人と、ソウル東部にある馬場（マジャン）畜産物市場に遊びに行きました。精肉店が集まるアーケード型の市場で、安く美味しい牛肉や豚肉を手に入れられる市場です。当日は雨のためか訪れる人が少なかったのですが、精肉店が軒を連ね、牛肉や豚肉の様々な部位を店頭で売っていたのが印象的でした。店の中には豚の頭が目に付く店も…なかなか刺激的な光景です。一通り市場を散策した後は、もちろん焼肉料理を食べました。一階の精肉店で肉を買い、その包みを持って二階の食堂に行くと、すぐに網

で焼いて食べることができます。日頃滅多に食べられない高級牛肉の韓牛（ハヌ）をたくさん、しかも、安い値段で堪能することができ、大満足の一日となりました。欲を言えば、もう少し色々な肉料理、豚焼肉やユッケなども食べてみたかったのですが、最初に高級牛の焼肉をガツガツ食べてしまった（友人曰く、順番を間違えた）ため、他の肉料理は次回以降の楽しみとすることにしました。先月の鷺梁津（ノリャンジン）水産市場もそうでしたが、市場を見学して新鮮な食材を手に入れてすぐに食すのは大変楽しいものです。今後も、勉学のストレス解消（という口実）で、色々な市場を訪れたいと考えています。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/12/01～2017/12/31)

１．勉学の状況

私が通っている大学は、12 月で秋学期が終わり、3 月までの休業期間に入ります。私も 22 日に大学院の最後の授業を受け、今学期の日程がすべて終了しました。

語学のクラスでは 12 月中旬に期末試験があり、筆記テストとスピーチテストを受けました。筆記テストは、今まで習った知識の確認と、それらの知識を活用した韓国語での作文が出題されました。また、スピーチテストは、ランダムに選択した主題に関して、先生と一対一で対面しながら韓国語で 5 分間スピーチするというものでした。どちらも準備して臨んだため、上々の成績を残すことができたと思っています。大学院の授業の方は特に筆記試験などはなく、学期中に読んだ文献の書評を提出しました。

9 月から始まった秋学期は色々な事が目まぐるしく過ぎ去り、すべての日程が終了した直後には軽い放心状態に陥るほどでした。今学期は授業の雰囲気やスピードに慣れるのに精一杯で、授業以外のことについて落ち着いて考える余裕がなかったことが少し悔やまれます。留学当初は、授業を受けながら自身の研究も進めていこうと考えていましたが、やはり韓国の大学で専門授業を受けることについて、あまりにも安易に考えていたかもしれません。大学の授業がお休みになる 1 月からは、自分の研究に専念できるよう計画的に行動したいと考えています。

一方で、今学期の大学の語学授業と大学院のゼミでは色々と貴重な経験をすることができました。語学のクラスを一緒に受けていた他の国の留学生たちとは少しずつ仲良くなり、何人かとは学期が終わった後も連絡を取り続けることを約束しました。ようやく仲良くなってきた頃に学期が終わってしまうので、少しばかり残念な気もします。

大学院のゼミを一緒に受けた史学科の院生たちには本当に色々なことを助けてもらいました。ゼミの形式や日程、講読テキストの入手などに関して、右も左もわからない私の質問（しかも拙い韓国語）に辛抱強く耳を傾けてくれて、非常に親切に教えてくれました。今学期の授業の中で受けた周囲の助力に感謝しつつ、残りの半年間も時間を大切にして過ごしたいと思います。

２．生活の状況

先月の報告書でも述べましたが、ソウルは 11 月から氷点下を下回る日が続き、12 月に入って益々寒さが厳しくなりました。韓国の人たちからしても、今年の 11・12 月は格別に寒いそうです。私の通う大学は坂が多く、雪が降った翌日には路面が凍結して大変危険でした。こんなところで転んで骨折でもしたら、笑い話にもならないと自分に言い聞かせつつ、

慎重に通学する日々を過ごしました。

外が寒ければ、部屋の内で食べる熱い料理が格別に美味しくなるのも当然です。12 月は学期が終わるということで、史学科院生たちや研究会のメンバーと食事（と飲酒）する機会も増え、熱い鍋料理など色々な料理を堪能しました。お酒の席では、酔いが回るにつれて気後れを感じることがなくなり、普段よりもさらに積極的に韓国語を話すことができたように感じました。これが俗に言う「飲みにケーション」でしょうか？

余談ですが、成均館大学校には、交換留学生が大学の韓国人職員と交流するプログラム（希望者のみ）があり、私も成均館大学校入学課の職員の方々と、10 月から 2 週間に 1 回ほど定期的に会って昼食を共に食べたりしていました。私にとっては韓国の方と韓国語で実際に会話する機会であると同時に、学生以外の方とも交流するきっかけになりました。また、韓国の大学の仕組み、例えば入試制度や大学の組織について聞くことができたのも、大変興味深かったです。12 月には「送年会」（日本の忘年会）を私のために開催してくれて、職員の方々と一緒にサムギョプサルを楽しみました。

こうした交換留学生と大学職員が出来るプログラムは大変面白いと思うのですが、千葉大でもこうしたプラグラムがあるのでしょうか？もし無いのであれば、ぜひ検討してみてはいかがでしょうか。留学生にとっては、自分が留学している大学について色々な面から知ることができ、貴重な経験になると思います。この半年で色々な出会いがあったことを改めて実感する年末でした。

左は生ダコの鍋／右は羊肉の串焼き（全自動で焼ける）

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/01/01～2018/01/31)

１．勉学の状況

新年を迎えたソウルは、相変わらず氷点下を下回る毎日です。日本も例年以上に寒いようですが、ソウルの寒さはそれとは比べ物にならないくらい厳しく感じます。私は年末年始に日本へ一時帰国していましたが、ソウルに戻ってきた途端、厳しい寒さのために少し体調を崩してしまいました。寒い日が続くと、ついつい外に出るのが億劫に感じてしまいますが、気を奮い立たせて、研究室に通う毎日です。

大学が休みに入ったので授業はなくなりましたが、大学院生たちの勉強会や研究会は継続して行われています。大学の授業よりも気軽に参加して議論が出来ますが、そうは言っても、毎回の講読文献などをしっかり読み込んでいかなければなりません。自分の研究も同時に進めなければいけないのですが、やはり勉強会の準備に追われてしまいます。もちろん、勉強会に参加することも自分の研究にとって大変有益ですので、あまり欲張らず、今出来ることをきちんとやるように心がけながら勉強しています。次の学期が始まるまで、時間を有効に活用して過ごしたいと思います。

こうした勉強会の他に、成均館大学校の大学院生と毎週１回程度、韓国語の勉強も兼ねて、一緒にコーヒーを飲みながら雑談する時間を設けています。韓国語では「言語交換」と言い、お互いに韓国語で話す時間、日本語で話す時間を設けて、それぞれが相手の言語だけを聞いたり話したりできるようにしています。一緒に話しているのは歴史学専攻の大学院生ですので、雑談と言っても、自然と研究の話や大学院生活の話にもなっていきます。私にとっては韓国語だけで会話すことで自身の語学力の向上を実感できますし、日本語を勉強している韓国人院生の役に立てることも嬉しく思っています。ただ、自分が思う以上に私の日本語は聞き取りにくい（滑舌が悪い？）のではないかと、少し不安です。学期中はなかなかこういった時間が自由に取れないので、なるべくこの時期に定期的に会い色々な事を話したいと考えています。

２．生活の状況

私は、大学が休みの期間中も前学期と同じく大学の寄宿舎で暮らしています。前学期中に一緒に暮らしていた留学生たちは寄宿舎を出てしまいましたが、その代わり、経営大学院のコースに参加しているフランス人の留学生たち（5 人！）と同じ部屋で新たに暮らし始めました。基本的には彼らとも問題なく付き合っていますが、正直に言えば、前学期のルームメイトたちとは異なる生活スタイル（食器の使い方、ゴミ出しなど…）に少し戸惑っているのも事実です。私の英語は韓国語以上に拙く、なかなか思ったことをフランス人のルームメイトたちに伝えられませんが、一緒に暮らす以上は言うべきことをきちんと言おうと心がけています。

1月の間に個人的にとても嬉しかった出来事は、私の留学先の成均館大学校の院生たちが東京に史料調査に来た際に、日本の院生たちと一緒に飲み会を開催したことです。私が千葉に一時帰国している時、ちょうど成均館大学校の院生たちが東京に3週間程度史料調査に来ていました。そのため、私が知っている日本の大学院生（主に韓国史専攻）に呼びかけて成均館大学校の院生たちと一緒に飲み会を開き、日韓の院生同士で楽しく交流しました。同じ歴史学専攻の院生同士、言葉の問題はあるにせよ、研究の事以外にも色々な話をしながら本当に楽しく歓談することが出来たと思います。私は、この半年間ずっと成均館大学校の院生たちに面倒を見てもらっていたので、この機会に日本の若手研究者を紹介して少しでも各自の研究の手助けになるような交流をしたいと考えていました。今回の交流会を契機に、成均館大学校の院生たちと日本の院生たちが継続的に連絡を取って親しく付き合えるよう、今後も積極的に携わっていきたいと考えています。日韓両国の間では様々な問題（政治レベル、外交レベルなど）が山積みですが、少なくとも、若手研究者同士はフラットに、そして率直に話すことができると思っていますし、こうした草の根の交流こそが問題解決にとっても重要なのだと思います。留学中だけではなく、留学が終わった後にも、こうした交流の機会を設けることに努力していくつもりです。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/02/01～2018/02/28)

１．勉学の状況

２月に入っても相変わらず極寒の日々が続いたソウルでしたが、さすがに２月下旬頃には寒さも少しずつ緩んできました。もちろん、寒いことは寒いのですが、少しずつ春が近づいていることを実感する日々でした。

大学の授業がない２月は、１月に引き続き、大学院生の勉強会や研究会などに参加しつつ自身の研究を続けました。大学の授業がないせいか、学期中よりは時間に比較的余裕があり、毎回の勉強会に向けての準備もじっくり取り組むことが出来ました。ただ、まだまだ議論の場では過不足なく自分の意見を韓国語で伝えられず、もどかしい気持ちもしました。半年以上が過ぎ、韓国語で会話することへの違和感はほとんどなくなりましたが、やはり専門的な会話では躓くことも多いと感じます。帰国するまで、たゆまず勉強を続けたいと思います。また、ある韓国の院生と話している時に話題になったのですが、私はどうも回りくどく格式ばった表現をしてしまう傾向があるそうです。考えてみると、私が日本にいる時には婉曲的で曖昧な言い方（断定的ではなく微妙な言い方）を好んでしゃべっていた気がします。しかし、韓国語で話す際にそうした曖昧な言い方をしようとすると、むしろ真意が伝わらず、相手も困惑してしまうことが多いように感じます。韓国語の能力がよほど高ければ微妙なニュアンスも表現できるのかもしれませんが、今の私の言語能力では、むしろ自分の意見や意志、感情をはっきりと伝えられるようにシンプルに表現した方が相手にも理解してもらえるようです。その韓国の院生曰く、「韓国人は率直に自分の気持ちを表現することを好む」だそうです。曖昧な言い方に固執していると、もしかすると心の奥底をなかなか見せない人、腹を割って話せない人、と周囲に誤解されてしまうかもしれません。韓国の院生と話しながら、そんな不安も感じました。

そうは言っても、所属している史学科の院生たちとは本当に親しく付き合うことが出来ていると勝手ながら自負しています。２ 月には大学の授業がないので、普段はなかなか出来ない遠出、院生たちとの史跡や博物館をめぐる踏査（巡検）に出かけたりもしました。２月の踏査で行ったのはソウルから車で１時間半ぐらいの仁川（インチョン）と江華島です。仁川は国際空港があることでも有名ですが、元々近代の開港地であり、近代史に関する史跡も数多くあります。また、江華島はソウルを流れる漢江河口にある島（日本史でも有名な江華島事件－1875 年の舞台）で、古代・高麗・朝鮮時代の史跡も多く存在します。こうした地を歩き回りながら、韓国史に関する様々な事項を学べたことは大変貴重な経験でした。機会があれば、ぜひまた踏査に参加したいと思っています。

また、２月には大学院の卒業式があり、一緒に勉強会で学んだ院生の修士課程修了を祝うことができました。日本の卒業式と同じように、成均館大学校でも卒業生の家族や友人が集まって卒

業・修了を祝い、卒業生と記念写真を取ったり花束をプレゼントしたりするなど、本当に晴れやかな日となりました。こうしたお祝いの場に呼んでもらえるだけで嬉しいのですが、同時に、留学生ながら成均館大学校史学科の一員にもなれた気がして本当に幸せな気持ちになりました。次の学期が始まっても、これまでと同じく、そして、これまで以上に親しくなりたいと改めて思った１日でした。

２．生活の状況

今年２月の韓国では平昌オリンピックが開かれていましたが、住んでいる寄宿舎にテレビが無く競技をリアルタイムで見られないという環境、そして、私個人のオリンピック自体への関心が薄いせいもあり、個人的にオリンピックの盛り上がりを意識する機会が少なかったです。強いて言えば、ソウル駅に平昌へ応援に行くと思しき観光客が多かったことぐらいでしょうか。ただ、カーリング競技は私の周りの韓国の院生たちの間でも話題となっており、韓国チームだけでなく日本チームへの関心も結構高かったです。皆でビールを飲みながら、カーリング準決勝（韓国対日本）をテレビで観戦したことは、楽しい思い出となりました。

２月にはいって特筆すべきは、韓国の旧正月です。旧暦に従い２月に「新年」をお祝いする日です。今年は２月 16 日金曜日が旧正月当日となり、その前後が旧正月連休となりました。韓国では、この連休中に帰省する人が多いそうです。日本に一時帰国していたために１月１日（新暦）のソウルの様子はわからなかったのですが、２月の旧正月の方が新年を迎えるお祝いムードが強かったのではないかと個人的に思います。日本では １ 月が年始で「新年」ですが、韓国では ２月中旬の旧正月の方が「新年」だという意識があるようです。こうした違いも大変新鮮に感じました。

間の悪い（？）ことに、この旧正月の連休中に私の家族がソウルに遊びに来ました。ソウルと水原（ソウルから高速鉄道 KTX で 30 分ほど）をそれぞれ１日ずつ旅行したのですが、旧正月の連休中には閉まっている食堂なども多く、食事の店を探すのが大変でしたが、一方で、景福宮などのソウル市内の古宮は連休中に観覧無料となり、その点では少し恩恵もありました。いずれにせよ、精一杯案内したので連休が終わるとクタクタに疲れてしまいました。ただ、家族も韓国旅行（特に食事）を満喫できたようなので、その点は良かったと思います。３月にも、日本から友人や大学の後輩が訪ねてくるので、出来るだけソウルを一緒に回りたいと考えています。留学しているこの機会にしか出来ないことを、これからも色々行っていきたいと思います。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/03/01～2018/03/31)

１．勉学の状況

３月に入ったソウルは少しずつですが気温が上がり、春の気配が感じられるようになりました。コートを着て外に出る日々が続いてはいますが、厳しい冬の寒さが終わることを考えると、それだけで少し気持ちが弾みます。

３月から韓国の大学は新学期が始まります。大学にも再び学生が溢れ、賑やかな雰囲気となりました。今学期に私が受講する大学院の授業は 2 つです。先学期は大学院の授業 1 つだけでしたが、留学最後の学期となる今学期は思い切って２つの授業を受講することにしました。授業の数自体は多くありませんが、やはり授業準備は大変です。すでに何度も報告した通り、韓国の大学院の授業は１回３時間で、毎回講読する文献も多いように感じます。その上、毎回の授業ごとに出席者全員が自分の意見や疑問、問題提起したい事柄をまとめたレジュメ（「発題文」）を作成していかなければなりません。先学期に比べると、文献を読む速度は格段に速くなりましたが、それでもやはり講読の時間はそれなりにかかります。１回の授業が終わるたびにぐったりと疲れてしまいますが、先学期と比べて授業内容や議論の中身が理解できるので、充実した気持ちになります。また、授業で一緒に学ぶ院生たちとも和気藹々と会話し、準備の苦労を分かち合いながら勉強しています。

私は、今学期が終わると帰国しなければなりません。最近は、帰国後の自分の研究方向についても少しずつ考え始めました。語学能力の向上を期するのは当然ですが、韓国に滞在している間に出来ること、例えば史料調査や研究機関の訪問、学会参加などをこれまで以上に優先的に行い、少しでも悔いを残さないようにしたいと考えています。学期が始まると、なかなか自分の研究にかける時間が確保できなくなりますが、空いた時間を上手に活用したいと思います。

２．生活の状況

３月で特に印象に残ったのは、史学科学部の踏査（巡検）に同行したことです。慶尚南道の史跡や博物館を 2 泊 3 日で巡りました。多くの史学科学部生や院生、そして史学科の先生方三名と一緒に、古代の古墳や王陵、復元された朝鮮時代の都城や官庁を見学して回りました。話によると、この踏査は史学科の授業の一環でもあり、毎学期に 1 回は必ず行われるそうです。見学して回る史跡について詳細に解説したガイドブックも配られ、私にとっても非常に勉強になりました。車が無ければ 1 日では回れないようなコースを貸し切ったバス 2 台に分乗して回り、少し疲れたものの、大変充実した旅となりました。そして、高校時代の修学旅行をなぜか思い出し、懐かしい気持ちにもなりました。誘ってくれた院

生たちに感謝の気持ちで一杯です。大学の教室で学ぶだけでなく、実際に史跡や博物館を見学することで、より歴史や文化についての興味も増していきます。学期中に遠方を旅することは難しいですが、ソウル近郊の史跡などを色々見学しようと今は考えています。

※伽耶山の海印寺は「ユネスコ世界文化遺産」とも登録されている名刹。「高麗八万大蔵経」を所蔵していることで有名。

※壬辰倭乱・丁酉再乱（文禄・慶長の役）での激戦地である晋州城。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/04/01～2018/04/30)

１．勉学の状況

今学期が始まって１ヵ月が経ち、大学院の授業にも大分慣れてきました。4 月のソウルでは桜も咲き、春の到来を実感しながら大学に通う日々となりました。

4 月からは定期的に、史学科の韓国人院生とチェコから来た留学生、そして私の三人で語学学習を行っています。私が日本語を 2 人に教える代わりに、韓国人院生とチェコ人留学生から韓国語の発音や単語のニュアンスを教えてもらっています。チェコ人の留学生は韓国留学生活が長く、韓国人も驚くほど流暢に韓国語が話せますので、私としては感嘆するばかりです。外国人が韓国語を習う際の苦労をよく知っていますので、韓国人ならば意識せずに使いこなしている発音や語彙についても詳しく解説してくれます。私は今学期、大学で韓国語の授業を取っていないので、個人的に韓国語を習うことができて大変助かっています。また、この 2 人から、日本語学習を始めた経緯や海外における「日本文化」の位置付けを聞くことができ、改めて日本語や日本由来の「文化」について考える機会が増えました。特に日本のアニメの多くが海外でも放送されているので、共通の話題として盛り上がります。主人公の名前や設定が変わっていたり、主題歌の歌詞が現地の言葉に翻訳されていたりする場合も多く、興味深い点が多々あります。こうしたアニメは、元々日本で制作されたものですが、海外で現地言語による翻訳や現地文化に合わせた調整を経て放送されることによって、様々な多様性を帯びたものへと変容していくのではないでしょうか？「日本文化」と安易に一括りにせず、こうした変容にも注目することで文化の多様性や奥深さに接近することができるのではないか。4 月から始めた個人勉強会はそんなことを考える機会ともなりました。

２．生活の状況

4 月初めのソウルで一番困ったのは、大気汚染です。日本でも一時期非常に話題となった微小粒子状汚染物質 PM2.5（ミセモンジ）の濃度が今年のソウルでは大変高く、ソウルの空は度々霞がかかったような曇り空となりました。街を歩く人のマスク着用率も高く、携帯電話にミセモンジ濃度警報を告げるメッセージも何度か届きました。余談ですが、日本では滅多に見かけない黒いマスクを着用して歩く人が多く、最初は少しギョッとしたことが印象に残っています。とにかく、ソウル在住の韓国人もうんざりしているようで、韓国人の院生たちとソウルから逃げ出す算段を冗談で話したほどです。私も咳やくしゃみが多くなりました。日本の花粉症も大変ですが、こちらの大気汚染もかなり深刻なようです。

そうした問題はありましたが、4 月にも韓国の人々と踏査（巡検）する機会を持てました。今回は、成均館大学校史学科の同窓会が主催する踏査に同行してソウルから車で 1 時間半ぐらいの

京畿道驪州（南漢江沿いの地域）を訪れ、高麗時代の史跡を中心にめぐりました。史学科同窓会の踏査ということで、色々な年代の同窓生の方々が参加しており、普段の学生たちとの交流とはまた違った経験をすることができました。年配の方々はお酒が大好きなようで、帰りの貸切バス車内ではマッコリを飲みながらの参加者挨拶（宴会？）が行われ、周りから促されて私も韓国語で自己紹介と踏査の感想を述べました。成均館大学校史学科同窓会の踏査に参加した外国人は私が史上初めてだとか(笑)。参加者の方々から色々と親切にしてもらい、楽しい 1 日となりましたが、一日中歩き回った上にお酒も飲んだので、少しばかり疲れたのも事実です。誘ってくれた史学科助教の方に本当に感謝しています。残りの 2 か月の間、時間が許す限り色々な踏査に参加したいと考えています。

そして、4 月末に歴史的な南北首脳会談が板門店で開かれたことも記憶に強烈に残っています。日本でも大きく報道されていたのではないでしょうか。韓国国内では当然ながらこのニュース一色でしたが、興味深かったのは、私の周りの学生たちの反応でした。もちろん、この件に対しての関心は非常に高かったのですが、私の予想よりもかなり冷静な反応が印象でした。会談や友好ムード自体は全員が歓迎していましたが、すぐに「統一」の希望を語る人は、少なくても私の周りではほとんどいなかったように思います。そうしたことを望んでいないというよりも、韓国の若い世代にとっては、北の朝鮮民主主義人民共和国に対して「全く別の国」という意識がかなり強いように感じます。上の世代との落差も含めて、色々と気になりました。世代差だけではなく、個人差も当然あると思いますが、韓国に今住んでいる人々のリアルな声を聴くことで、自分の認識もまた少しずつ変わっていくかもしれません。留学している今だからこそ実感できる、そして、日本での報道だけでは全く見えてこない多様な面に注意していこうと考えています。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/05/01　～2018/05/31)

１．勉学の状況

５月のソウルは、思わず外に出たくなるような気持の良い日々が続きました。気温は暑くも寒くもなく、大変過ごしやすかったです。

こうした良い天気にもかかわらず、5 月は相変わらず大学の授業準備に追われる毎日となりました。3 月から購読していた文献が終わり、一息つく間もなく、次の文献を講読し始めました。すでに何度も報告していますが、韓国の大学院の授業ではたくさんの講読文献を読み進めるため、次から次へと準備をしなければなりません。こうした授業スタイルについては、多くの研究文献を一気に読むことで基礎的知識が蓄積されるという利点がある一方で、一つの議論に掛ける時間が少なくなり消化不良に陥ってしまう難点もあると個人的に感じます。いずれにせよ、来月には担当箇所の発表も控えているため、学期が終わるまで気の抜けない日々が続きそうです。

２．生活の状況

５月には大学で学園祭があり、多くの学生で賑わいました。成均館大学校は建物が密集しているせいか、それほど大規模には開催できないようでしたが、中央部分の中庭ではイベントが連日開催され、サークルなどがテントを張って様々な屋台を出していました。夜には中庭の仮設会場でコンサートが開かれ、夜遅くまで大変な盛り上がりでした。韓国の人気アイドルグループも来校してコンサートを行ったようです。その日はとてつもない人だかりだったので、大学構内を通行するのに苦労しました。日本と比べると、韓国の学生たちは非常に熱狂的な様子で、歓声が建物内部にまで届いていました。私が夜遅く通ると、大学の一角では屋台と仮設の机・椅子が設置され、多くの学生たちがお酒を飲みながら盛り上がっていました。過ごしやすい気温の中、外で飲むビールは格別だったでしょう。

５月には、史学科の院生に誘われて、再びソウル市内の踏査に出かけました。日本でも有名な明洞で華僑の足跡をたどる踏査でした。日本でも横浜・神戸のチャイナタウンが有名ですが、ソウルでも近代以降に明洞などで中国商人たちが商売を営み始め、現在でも中華料理店などが多く存在しています。韓国近現代史と華僑とのつながりを学びながら、明洞を中心に歩き回りました。あいにくの雨でしたが、韓中関係の一側面を学ぶ貴重な機会となりました。

正直に言うと、5 月は授業と帰国の準備に追われて、思うように外出ができませんでした。留学が終わるまで残された期間は少ないにもかかわらず、少しもったいなかったと後悔しています。次に 5 月のソウルを訪れる際には、よりこの過ごしやすい時期を楽しみたいと感じました。

海外派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2018/6/1～2018/6/30)

１．勉学の状況

とうとう留学最後の１ヶ月となりました。学期末の６月には、授業と研究会で１回ずつ報告を行い、これまでの勉学の一つの集大成となる月となりました。

大学院の授業では、学期末の最後の授業で講読文献の担当箇所について発表を行いました。レジュメの準備に非常に時間がかかりましたが、同じ授業に出席している韓国人院生の助けも借りながら、なんとか無事に終えることができました。質疑応答の際に教官から質問を受けたのには大変緊張しましたが、なんとかやり過ごす（？）ことができたと思います。すべての準備を韓国語で行うことは相変わらず大変でしたが、韓国語能力の上達を実感できたのは幸いでした。

個人的に参加してきた研究会でも研究発表の機会を頂き、自身のこれまでの研究について発表しました。参加者は日本語の文章を理解できるため、私が韓国語訳したレジュメよりも元々の日本語のレジュメの方を用いて議論してくれました。なんとなく切ない気分にはなりましたが、色々と親身にアドバイスをしてくれたおかげで、自身の研究の長所と短所を自覚することができました。研究の不十分を痛感する一方、帰国後の研究方向について自分なりに一定の道筋が見えてきました。こうして時間を作って研究報告を聞いてくれた方々に報いるためにも、帰国後にさらに精進を重ねて研究を進めていかなければならないと強く思いました。

こうして春学期は終わりを迎え、留学中の研究活動も一区切りとなりました。振り返ってみれば、言語の問題だけではなく、韓国朝鮮史に関する基礎的な事項や幅広い知識の不足を痛感させられる日々でした。同時に、韓国の研究者や大学院生と議論する中で、「日本で韓国朝鮮史を学ぶ意義はどこにあるのか」という事を、これまで以上に自問するようになりました。今回の留学によって、自身の専攻領域・時代に対する興味関心が益々湧いてきたことを実感しています。まだまだ理解が不十分な点、未知な点について、これからも新鮮な気持ちを持ち続けて向き合いたいと思います。そして、海外から来た私に親身なアドバイスと助力を授けてくれた韓国の方々に感謝の念を強く感じています。

２．生活の状況

留学を終えて帰国するに当たって、1 年間にお世話になった方々に改めて感謝の思いを伝えたいと考え、帰国までに色々な方と会って食事をしました。皆が温かい言葉をかけてくれるので、嬉しい反面、韓国を去ることに正直耐え難い気持ちにもなりました。特に交流が親密だった成均館大学校史学科の院生たちも歓送会を開いてくれ、にぎやかに帰国前の挨拶を交わすことができました。改めて振り返ると、出会いに恵まれて、周囲の人々の多大な助力を受けることができました。これからは気軽に会ったり食事をしたりすることができないのだと考えると悲しい気持ち

になってしまいますが、またソウルを訪れた際、再開できることを今から楽しみにしています。研究だけでなく、こうして結ぶことができた縁（「人縁」）をこれからも大事にしようと強く強く念じています。